［おことわり］
この対談は、東孝光氏が病気ご療養中のため、古谷誠章氏の質問に対する東孝光氏の回答を、東利恵氏に口述筆記していただき、それをもとに編集室で誌上対談として構成いたしました

住み方は建築家が定義するものではない。

東 孝光×古谷誠章

Takamitsu Azuma｜建築家｜ゲスト × Nobuaki Furuya｜建築家｜聞き手

高校時代にゲーリー・クーパーの映画『摩天楼』を見て、建築家になろうと思われたそうですね――古谷

格好の遊び場だった焼け跡

古谷｜このシリーズは「モダニズムの軌跡」という、20世紀のモダニストのインタビューシリーズなんです。東さんは、ただ今、病気療養中でいらっしゃることは承知しておりますが、どうしても登場していただきたいと思っておりまして、東利恵さんに橋渡しをお願いして、誌上対談として構成するものです。お加減のよろしい時に少しずつ区切ってでも結構ですので、お答えいただければ幸いです。どうぞよろしくお願いします。

このインタビューの一番最初は、決まった質問があって、それは「そもそもどうして建築家になられたんですか?」という質問です。東さんの場合はどうだったのか、非常に興味がありますが、ちょっとそれは後回しにして、その前にぜひ、伺ってみたいことがあるんです。まず最初の質問は、子どもの頃の話です。大阪の上本町辺りでお父さまが、たしか町工場をされていたという話を何かで読んだことがあります。「その頃、住んでいた家は、どういう家だったんですか?」という話から、お尋ねしたいんです。実はこれには訳があって、ある時、藤森（照信）さんに「お前の住んでいた家はどんな家だ?」と聞かれたことがあるんです。「建築家は子どもの頃に住んでいた家を見ると、大概のことは分かる」と藤森さんはおっしゃるんです。僕は幾つかの家に住んだことがあるんですけど、小さな頃に、本当に短いトンネルみたいな、ちっちゃな家に住んでいたことがあるんです。玄関に入るとトンネルがあって、すぐ向こう側は庭…みたいな小さな家。そう説明したところ、「だからアンパンマン（ミュージアム）とか、茅野（市民館）とか、みんな門構えみたいな空間が出来るんだね」と言われたことがあるんです。実はそういう入れ知恵があって、今日は東さんが小さい頃、どういう家に住まわれていたのかをお伺いしようと思いました。たぶん、お住まいは町の真ん真ん中にあって、そしてそこからお父さまの工場はちょっと離れていて、まさに町の中に暮らしていたという、東さんのルーツがきっとそこにあるに違いないと思っているんです。

東｜確かに住まいと工場は別の場所にありました。私は7人兄弟の上から2番目で長男です。一番下の弟と私以外は姉妹で、女性の多い家族でした。住まいは何軒か変わりましたが、大阪の玉造など、町なかで育ちました。小学校時代はすでに戦争に入っていて、終戦前には疎開もしましたが、やはり子ども時代の記憶は戦後の焼け跡にあります。ちょうど終戦の日に大阪に戻りまして、その時に見た焼け跡から始まりました。当時は12歳、小学校6年でした。焼け跡は、そこに何があるのか、好奇心の的でした。探検をしたり、掘り出しては何かを見つけてみたりとか…。そうしているうちに中学校に入って、歩いて通学しながら、また冒険をするわけです。焼け跡に残っている防空壕に入ったり…。子どもにとって楽しい隠れ家みたいな空間がいっぱい発見できまして、それが楽しかったです。ところが、不思議なことに、当時住んでいた家については、あまり覚えていないんです。

古谷｜そうですか。ご兄弟は7人だけど、弟さんまでの間、全部女性なんですね。

東｜そうです。姉が1人。僕の後ろは女性ばかりで、弟とは歳も離れていましたので、女性だらけのところで育った。だから逆に言うと女性陣が大勢いるので、長男ということもあって、あんまり溶け込んでいなかったのかもしれない。長女の姉が母を手伝って妹たちの面倒を見ていました。そういう意味では、妹たちにとっては姉には母のような心のよりどころ的なものがあるし、私は家長的なお兄さんという感じだと思います。

古谷｜その母系社会的な感じが面白いですね。それで結局、東さんは東京に出てきてしまわれたわけですよね。今、ご実家にはどなたが住んでいらっしゃるんですか?

東｜もうないんです。父は1958年に他界しましたし、私は大学に入る頃には、すでに家を離れていました。長男の義務を押し付けられるという状況でもありませんでしたし、大学の卒業直前に結婚して、まずは自分の独立を考えていました。そして結局、東京に出ることを決心するわけです。守るような家代々の財産があったわけではないですし、妹たちも結婚して嫁いでいきましたので、結局、大阪には実家はないことになりました。

古谷｜でも小さい頃は、大阪の中心のようなところでお育ちになって、近所にあるお父さんの工場や家には、たぶんいろんな人が出入りしていたでしょうし、その頃から、きっと遊ぶのは町の中だったんだろうと思います。

東｜相当走り回っていました。

古谷｜子ども時代に町なかで遊んでた様子をぜひ、伺いたいです。

東｜子ども時代はチンドン屋さんとか物売りとか、昔だとガマの油売りじゃないですけど、口上を言いながら売り歩くような人たちの後をついて回ったんです。ああいうのが大好きだった。それと、焼け跡が格好の遊び場でした。

古谷｜防空壕には結構、空間体験のようなものがあったと、すごく面白い表現をされていますね。それから中学に行かれてからは、兵舎か何かに使われていた校舎に入って、その頃のベッドだのマットレスだの、まだ置き去りにされているものを掘り出したり、自分で探したりして、人がつくったものが出てくると面白かったと書いてありました[1]。どうして人がつくったものが面白かったのかも伺いたいと思います。

東｜詳しくは覚えていないんですが、私は、昔は建築家か考古学者になりたかったんですよ。

古谷｜そうですか、だから“掘り出す”というような言葉が、割としょっちゅう出てくるんですね。

東｜掘り出して探したり、空間を見つけて隠れるようなことが楽しかったですね。何かを発見する喜びと、それに自分で意味を見つけること。焼け跡や防空壕が遊び場になって、違う意味を持つ空間に変わる。遊びの中で別の空間に変わっていく、そこが楽しかったわけです。発掘することもそれに似ています。焼け跡で暮らしの痕跡を見つけたり、発見したものが何かを語ってくれたり、想像性を喚起させてくれることが面白かった。不完全な部分を見つけて組み合わせたり、推理しながら話をつくり上げていく面白さ、完璧ではなくなったものが持つ魅力…。考古学者の（ハインリッヒ・）シュリーマンの話とか、アトランティスの本とか、よく読みました。つまり想像力をかき立てるような都市や空間が好きでしたね。宇宙にもとても興味がありましたし、SFも大好きでした。若い頃に集めたSFマガジンが、「塔の家」[1966]の地下に今もあります。

古谷｜なるほどね。

阪大へ入学、そして郵政省に…

古谷｜だんだん成長されて、大阪大学に行かれるんですが、その頃、阪大は構築学科と言ったんだそうですね。すごい硬い名前ですね。

東｜土木と建築が一緒だった学科で、建築だけではなかったんです。

古谷｜地元ですから阪大に行くのは自然だったかもしれませんが、構築学科は、意外にも技術者教育だったそうですね。東さんは、建築なのだから、もうちょっとデザインの勉強ができると思っていたわけですよね。そして、この辺りで最初の「どうして建築家になったんですか?」という質問に戻りましょうか。これもいろんなところでおっしゃったり書いたりしていらっしゃるので、実はよく知っているんです。映画の『摩天楼』を見たからなんですよね。

東｜そうです。もともと映画が好きで、高校時代にゲーリー・クーパー主演の『摩天楼』を見て、私は建築家になりたいと思った。

古谷｜『摩天楼』という映画は、要するに（ルイス・）サリバン的なものが没落していって、（フランク・ロイド・）ライト的なものが台頭してくるという映画だった。それでライトが、私にとっては大変まぶしく、うらやましいというか羨望を抱いたと書いてありました[1]。映画を見た高校生当時は、そういう建築家の思潮に対する知識がまだなかったかもしれないですね。

東｜そうです。映画では、ゲーリー・クーパー扮する建築家が、自分の設計したとおりにつくられなかった建物を壊すんですよ。それが裁判になって、その建築家は信念を訴えて無罪になるんです。ですから、ライトが好きということではなくて、建築家という職業を知ったということですね。そして、信念のある、正義感あふれる建築家という職能に感激したんです。ライトとサリバンについては、当時はもちろん知りませんでした。その後、ライトがモデルになっていることは分かりましたが、ライトというよりも、やはり映画の中の“建築家”が強烈な印象だったという方が合っています。

古谷｜そうでしょうね。それで、実際には阪大構築学科の技術者教育に、多少がっかりされたのかもしれないけれども、学生としてはかなり活発に活動された様子がありますね。建築学生会議のメンバーになるとか、それから当時、京大の西山（夘三）研に行ったり、あち

[1]　東孝光「インタビュー：東孝光―わが軌跡を語る」『日本現代建築家シリーズ4―東孝光（新建築別冊）』1982.4

建築家という職業を知ったということですね。そして、信念のある、正義感あふれる建築家という職能に感激したんです――東

大阪に生まれ育った東さんが、突然、東京行きを決心され、以来、今日に至っている。すごく大きな転機だった…——古谷

こちで交友を広げられたと聞いています。

東 | おっしゃるように、阪大に在学中は大学の枠を越えていろいろ活動していました。なぜかというと、先ほども言いましたけど、阪大は土木系が強くて、設計ができる研究室は足立(孝)研究室しかなかったんです。私はそこに行くだけでは熱い思いが満足しきれなくて、いろいろと動き回っていました。大手設計事務所にアルバイトにも行ったりしましたが、トイレばかり描かされたりしました。アルバイトですから、そんなものでしょうけど。それで郵政省にかけてみようと思ったわけです。

古谷 | 驚いたことに、就職浪人をしてまで郵政省に行かれるんですよね。郵政省の仕事ぶりが、何かで目に留まったんでしょうか?

東 | 郵政省には、戦前は吉田鉄郎さんがおられたし、当時は外務省のコンペや学会賞を取られた小坂秀雄さんや薬師寺厚(ひろし)さんがおられたんです。論文を読むと、みんなで議論をしながら建築をつくることもあると書いてあった。お役所の中では一番建築家的な表現ができるところだし、そういう風土があるとも聞きました。だから大変期待して入ったんです。その頃はまだ、住宅の設計を中心に活躍するアトリエの建築家はいなくて、大手の組織設計事務所が大阪にもたくさんあったんです。でも、私はそういう大手の設計事務所ではなく、あえて郵政省を選びました。ところが、実際入ってみたら議論なんてありませんでした。ひたすら標準設計をしていた印象が強いですね。その上、ちょうど大型郵便局をつくる前の時代でしたので、仕事が少なかったんです。1年に1つ設計すると、後はやることがないような感じでした。それでまた、課外活動を始めるようになったんです。学生会議の延長で知り合いの仕事を手伝うとか、足立先生から頼まれた図書館の図面を日中、郵政省で描いたりもしていました。ある時、上司がやって来て、「君、何をやっているの?」って聞かれて、「いや、ここがこうなっているんです。面白いでしょう!」なんて堂々と説明するものだから、上司はあっけにとられて、叱るのを忘れた…、なんてこともありました。

古谷 | 仕事が本当になかった時代なんですね。

東 | あっても小さな郵便局が1年に1軒で、図面を描いて設計監理になると常駐で現場に行くわけですよ。幾つか関西エリアの小さい郵便局の監理もしました。

古谷 | なるほど。結局、入ってみて少しがっかりされたからかどうかは分かりませんが、昼間は郵政省に行って、今度は夜、坂倉事務所に行くようになるわけですよね。少し回り道をされたかもしれないけれども、だんだん、いわゆるアトリエ的な建築家のところに行かれるわけですね。

東 | まだ郵政省にいる時ですが、坂倉事務所が大阪にも事務所をつくって、西澤文隆さんがいらっしゃって、面白い仕事をしているらしいことを知って、早速、「入れてください」と頼みに行ったんです。そうしたら西澤さんに「郵政省に行っているのにいいの?」と言われて、とりあえずは夜、バイトとして働かせてもらったんです。そのうちに、坂倉(準三)先生に引き合わせていただいて、正式にスタッフになることが決まりました。

古谷 | 東さんは大学の時も学生会議とかいろいろな活動をされていますけど、坂倉事務所に勤め始めてからもいろんなことをなさっていますね。“チェックの会”っていうのもやられて、お仲間と一緒に「大阪の町をもっと面白くするには…」なんて考えたりしたそうですね。どうしてこんなにも、いろんなことをなさったのかと思うほど、精力的ですね。このチェックの会というのは、どういう会で、どんな人がいらしたんですか?

東 | チェックの会は大学の頃からの友人で、阪大の教授になった紙野桂人さんや辻野(純徳)さん、坂倉事務所の友人の山崎泰孝さんたちとやっていた勉強会なんです。みんなで集まる喫茶店が「チェック」という名前だったことから、チェックの会という名前になったんです。坂倉事務所の仕事は大変楽しくてやりがいがあったのですが、でも、私は課外活動もしたかったんです。それで自分たちでテーマを決めて勉強会をしていました。

古谷 | 坂倉事務所時代に手がけられたものは幾つもあるんでしょうが、枚岡市役所もご担当だったそうですね。その頃、坂倉さんとのやり取りとか、事務所での仕事ぶりというか、そういうのを伺いたいと思います。

東 | ちょうど大阪の坂倉事務所も忙しくなってきた頃でした。スタッフみんなが良い建築をつくるために粘って仕事をしていましたので、やっとたくさん勉強できる場所へ来たと思いました。それでもいずれは独立したいと思っていました。枚岡の市庁舎が終わる頃は、もう30歳を過ぎていましたから、ヨーロッパ旅行に行って、その間に今後のことを考えようと思いました。そして、「ヨーロッパに勉強に行きたい」と西澤さんに話して、半年間の休みをもらう内諾を取ったんです。ところが突然、坂倉先生から「東京に面白い仕事があるから来なさい」と言われたんです。ヨーロッパ旅行のことを話したら「それもいいけど、ヨーロッパはいつでも行けるでしょう。この仕事はめったにできるものではないから…」と説得されて、なるほど…と思って、新宿西口広場のために、東京に行くことを決めてしまったんです。後から考えると大きな転機だったかもしれませんが、とにかく建築に対してハングリーでしたから、坂倉先生の話を聞いて家内にも相談せずに決心しました。建築一筋で動いていたんですね。

古谷 | 大阪で生まれ育ったはずの東さんが、新宿西口広場の仕事のために突然、東京に行くことを決心され、それ以来、今日に至っているわけですから、人生にとって確かにものすごく大きな転機だったわけですね。その東京行きを決心された時は、どんな感じだったか覚えていますか? 利恵さんはもうお生まれになっていたんですか?

東 | 私は単身で新宿西口広場の現場に行きましたが、その頃、娘は幼稚園だったと思います。

古谷 | 妻子を置いてまで東京に行くというのは、よほど何か考えるところがあったんだと思うのですが、どういう動機というか、心持ちで決心されたのかを伺いたいです。

東 | 大阪を離れることで、東京で独立するという選択肢ができました。しがらみのある大阪から離れたところで始めれば、東京でも大阪でも仕事ができる。大阪で始めると反対に東京の仕事は難しくなるとも考えました。また、東京ではアトリエ事務所ができる自由な環境というのも感じていたのかもしれません。家内は実家から大阪の池田駅前の薬局を1軒、任されていたこともあって、とりあえず単身赴任したわけですが、私たち夫婦は、昔からこだわりはあるけど縛られたくないところがありましたので、ちょうど良かったのかもしれません。新宿西口広場の仕事をしている間に、私は東京に住もうと決心してしまいました。家内も賛成してくれました。大阪に縛られたくなかったんだと思います。だから坂倉先生に「こんなに面白い仕事にかかわるチャンスなんて、めったにないよ」というお話をいただいた時も、すぐ上京を決心できたのだと思います。

古谷 | ご家族を呼ぼうとされた時は、最初のお住まいはどこでしたか?

東 | 最初は神宮前2丁目の2軒の借家を西口チームのメンバーが借りて、片方には吉村篤一さんが住んでいたんです。そこに、家内と娘がたまに上京して、数日いて帰っていくという生活でした。家内は実家の薬局をやりながら、夫婦で資金を貯めていました。新宿西口広場が終わる頃、娘の小学校入学を契機に上京して、その借家で数ヵ月暮らしました。

古谷 | それはまだ、塔の家は出来る前ですよね。

東 | 出来る直前です。東京で一緒に暮らすことを決めてから、急いで土地やマンションを探し始めました。

古谷 | 結局、郊外にまでいろいろ探しに行かれたそうですね、長津田とか八王子とか…。

東 | 行ってはみたのですが、実は、家内の家は大阪の船場の商家で、大阪の真ん中に家があって、戦争で焼けるまでは丁稚さんが大勢いるような薬問屋でした。私も町なかで育ちましたので、郊外住宅地には住みたくなかったんです。それでも、新婚時代は当時、開発されてきた団地に住んだり、郵政省の時代には現場の常駐監理もしましたので、当時は田舎だった加古川の大きな屋敷の門屋に住んだこともありました。ところが家内は、夜になると真っ暗になる静かな住宅街にはどうしても馴染めなくて…、24時間動いている町が好きなんですね。住まいと職場が近い、あるいは混在している場所が町だと思っているようでした。

古谷 | 実は僕も同じ感覚なんです。ずっと世田谷区の三宿で生まれ育ってきたのですが、ある時、事情があって松蔭神社の6畳1間の小さい家に引っ越したんです。これがその門型の原型の家ですが、でも町の機能が周りにたくさんありますから、自分の家が不足していても、銭湯に行ったりして楽しく暮らせるんですよね。

東 | そう、暮らせる。遊び場は外だし、別に勉強する以外は子どもたちは外にいればいいわけですから。

古谷 | その感じは、僕はすごくよく分かるんです。うちの家内も実家が塔の家のすぐ近くですから同じ感覚なんです。要するに郊外には住めない。それで家を探された時は、コープオリンピアも見に行かれたんですよね。それも嫌だと思った感覚も聞きたいです。あれは町の中にありますでしょう?

東 | あそこは、当時、最先端のマンションだったんです。事務所は近くのセントラルアパートだった時期がありましたが、私たちは地面に接して暮らしたいという思いが強かったですね。だからといって、郊外住宅地に行くことで妥協はしたくないし、マンションは苦手で、郊外は町の暮らしではないと強固な思いを2人とも持っていました。それで青山のあそこに土地を買って、家を建てることになった。6月に着工して、その年の秋にはもう引っ越すというスピードぶりでした。

坂倉先生から「東京に面白い仕事があるから来なさい。めったにできるものではないから」と説得されて…——東

塔の家の顛末

古谷 | 塔の家の敷地ですけど、最初は今の倍ほどの面積だったものを、倍では買えないと言って半分にして売ることを提案するんですよね。半分が売れたら残りの半分を自分で買う…と持ち掛けた話は有名だけど、面白い話ですね。すごい知恵だなと思って。だけど半分にしたら思惑どおりに売れた。どっち側の半分ですか?

東 | 最初は敷地が予算に合わないので、「2つに分けた方が売れますよ」って不動産屋さんを説得したんです。そうしてみたら、実際に買い手が出てきたものですから、分けて売ることが実現したんです。場所を選んだ記憶はないのですが、たまたま裏表とも通りに面

した方になったんです。当時はマツの木が1本立っていました。

古谷 | キラー通りはオリンピックのために出来た道ですから、あの辺は、土地がみんな三角になっているんですよね。ワタリウムも三角になっていますよね。

東 | 今は例えば隣の堀内カラーは、その小さな三角形が幾つか合体して大きな三角形の敷地になっていますけど、当時、塔の家の隣は同じくらいの大きさの敷地に、平屋建ての宝石屋さんでした。

古谷 | 実際問題、仕事としては、片一方で新宿西口広場を1／500で設計し、片一方で塔の家を1／50で設計していたことになりますでしょ。かなり両極端なものをやられていたわけですが、相当スケールが違ったから、逆に良かったんですかね。

東 | たぶんそうだったと思います。反動的なものがあったかもしれない。

古谷 | 新宿西口広場で少しくたびれてくると塔の家を考えるとか、その逆とか…ね。その辺のやり方もちょっと伺いたいと思います。たしか、1／50の方は、本当に小さくてセンチの単位を争って決めていかれたのでしょうし、最小限とか極限の身体感覚とか、いろんなことを考えられていたでしょうね。ですから、東さんはもともと、ある小さなもの、小さな寸法に対する感受性をお持ちだったと思うんです。それから、この塔の家のことを、最初は“塔状住居”と書いてあって、いつの頃からか“塔の家”ってなるんだけど、これはどうしてですか?

東 | 最初に取り上げたのは『新建築』で、小さい記事の一部に“東邸”として掲載されました[2]。大きく記事として取り上げてくれたのが植田実さんで『太陽』という雑誌です[3]。その時に“塔の家”という表現が初めて出てきた。私が言ったわけではなく、植田さんを始め周りの方々が塔状住居とか、塔の家という名前を付けてくれました。初めの頃は“東邸”という扱いが多かったように記憶しています。

古谷 | それから、聞くだにうらやましいのは、奥さまがあるインタビューの記事[4]の中で「とにかく東の設計した家に住みたいと思うことがすべてでした…」って言われたんです。これは本当に夫冥利に尽きるというか、すごい感動的な言葉ですね。床がデコボコしているとか、いろいろ問題はあったとしても、とにかく東さんがつくられた家に住みたい一心だったと言われた。良いお話ですよね。

それから今度は、その家に住み始めて年月がたつと、いろいろものが増えたり、起こったりします。とにかく、スペースが限られているから、何か新しい電化製品を買おうと思うと、前のものを捨てなきゃいけないという話

[2] 『新建築』1967.1
[3] 『太陽』1967.5
[4] 東孝光・東節子「インタビュー:街を見続けてきた家 「塔の家」リニューアルを終えて」『住宅特集』1998.2

塔の家
所在地:東京都渋谷区
設計:東孝光
敷地面積:20.56m²
建築面積:11.80m²
延床面積:65.05m²
規模:地下1階、地上5階
構造:RC造
工期:1966.6–1966.10

左ページ——北側から見る[撮影:2007年]／
左——ブルーの残る階段と、キラー通りを借景に取り込む小さな窓／右——居間[撮影:2007年]

何も予定がないのに独立なさったと聞きましたが、塔の家が建った後は相当数の住宅を設計されている——古谷

[5] 『ディテール』1999.1

日本万国博覧会・三井グループ館※

をされているんですが、その時に東さんが本領を発揮されるのが、“町の中に住む”という感覚だと思うんです。つまり家の中はある限られた面積だったかもしれないけれど、町の中をうまく使ったり、外に代償を求めたりしながら、それでうまくバランスを取ったんじゃないかなと思うんですね。事実、前に一度『ディテール』[5]の取材でお邪魔した時に中を拝見して思ったんですが、入ってみると意外にいろんな窓があって、外のキラー通りの上の空間とか、路地のこっちの方とか、外にある空間がいろんなふうに取り込まれているので、中にいる物理的な空間の小ささと、感じる空間の広がりは違っていて、他人の家や町の中のものを、うまくご自分の住空間に取り込んでいる。

東 | 借景です。

古谷 | そう、借景で取り入れていると思って、それがとても面白かったんです。そして、いつか早稲田大学に来て下さった時に、塔の家に住み始めた頃の話を伺ったんです。最初は一番下の地下室を事務所にされたでしょ。それが「朝、起きて家で朝ご飯を食べて、そのまま下に行く気がしないんですよ」と言われた。ご飯を食べられるのかどうか分からないけれど、上で起きてから、とにかくキラー通りを青山通りまで歩いて行って、右に曲がって行くと途中に「レオン」という喫茶店がある。実は僕も青山高校だったから、しょっちゅう行っていた喫茶店なんです。そのレオンは、ちゃんとサイフォンコーヒーを入れてくれる喫茶店で、しかも1杯お代わりが無料なんですよ。1杯頼むと、もう1杯飲めるんですよね。

東 | そうです。そこへ行ってコーヒーを2杯飲んで、新聞を読んで、原稿を書いて、そして帰りは道路の反対側の歩道を歩いて帰ってきて、今度はダイレクトに地下室に入る…。そうするとうまくいく。塔の家の上から下に真っすぐ通勤するのはダメなんですよ。

古谷 | そうそう、そうおっしゃっていました。それがすごく印象的でした。

東 | 町を歩く時間は大事だと思っていましたし、町の通り方も2、3通りあって、どの道を通るかは、その時に決める。短い距離なんだけれども、そこで自分を切り替えるんです。実は家内は外に出たがらないんですよ。窓から常に町が見えていればそれでいい。ただ、見える景色が郊外住宅地ではダメなんだろうな…とは思いますね。

古谷 | やっぱり町の変化を楽しまれている気がしますね。だって、あの通りは本当に目の前でいろんなことが起きますでしょう。

東 | 起きますね。デモ隊が通ったり、車が燃やされたり…。

塔の家の30年、住みながらの改修が…

古谷 | その後、塔の家にユーザーとして住み続けているうちに、30年たって改修された。最初はコンクリートが少しくたびれて中性化してきたものの改修でしたけれど、コンクリートがコンクリートになっただけだからあんまり劇的に変化してないんですね。ところが、僕たちにとってやっぱり大きかったのは窓ですよね。スチールサッシだったものが、木製のサッシに換わる。僕は前にも伺って知っているのですが、読者のために、どうして換えたくなったのかを、もう一度お聞かせください。たしか、利恵さんの部屋の窓が開かなくなったことがきっかけとか…。

東 | そうです。5階の建具がだんだん開かなくなって、最後は物干しに出るのが大変なくらい狭くなってきました。同時にあの建具に出合ったことも大きいですね。

古谷 | あれはスウェーデン製ですか?

東 | スウェーデン製の木製建具です。私は既製断面のアルミサッシは嫌いなんです。だんだんアルミの時代になってきましたが、建具にアルミを使うのはできれば避けたい。とにかく、アルミには換えたくないために、ずっと我慢してきたのですが、たまたま北海道の住宅(「白老の家」[1991])をやる時に、あの建具を知った。それも大きなきっかけです。木製建具でもこれぐらい気密性や性能が高くて存在感があるなら…と、その住宅を設計してからすぐに決めました。

古谷 | 5階から始めたんですよね。

東 | そうです。上は見えないからやってみようと思いまして。

古谷 | 上から下に段階的にやられたんですね。それが面白かった。

東 | 数年かかっても住みながらやると決めました。昔の大工さんがちょこちょこと出入りして直すような感じの直し方で、大々的にはやらない。まず実験だと思って、こっそりと見えないところからやり始めたんです。

古谷 | 面白いですね。それからデコボコだった床も、フローリングを張られるんですよね。

東 | はい。私たちも、だんだん歳をとってきましたので、家内がデコボコの床に掃除機をかけるのは負担のようでしたし、2階の床に断熱と床暖を入れることにしたんです。ただ、どれぐらい薄く仕上げるかには、すごくこだわりました。

古谷 | なるほど。仕上げ代の範囲でやられたわけですね。

東 | そうです。それである会社に付き合ってもらって、断熱もある程度の性能の中で、どれぐらい薄くできるかというところから始めました。フローリングもオークの無垢材で薄いものに徹底的にこだわった。だけど、全部は一度にやらなかった。階段の段差が変わってくると困るということがあって、2階の床をまず最初にやったんです。1階がガレージのために寒かったものですから…。そしたら家内が味を占めて、これは掃除がしやすい…と。

古谷 | 全部、敷きたいとおっしゃった。

東 | そうです。上の方まで敷きましたね。それで倒れる直前まで、「残った階段をどうするか」が私のテーマでした。床がフローリングに変わったので、階段に手を入れるとブルーだったオリジナルの色がなくなる。でも、どうしてもブルーは残したい。色モルタルとか、いろんなものを見つけては調べたり、サンプルを取ったりしましたけど、最終的に決めきれずにそのままです。

古谷 | じゃあまだ、今も宿題になってるわけですね。

東 | そう。ただし穴があいてきたので、今、大変なんです。デコボコしていると、人の形に馴染んで穴があいてくるんですね。

古谷 | そりゃそうですね、擦り切れてくる。たしかに塔の家の床を変えるのは、大変ですよね。でも、本当は最初だって仕上げは何かなさろうとしていたんでしょう?

東 | 予算がなかっただけなんですよ。

古谷 | でも仕上げがしていなかったのは、幸いですね、後から見れば。それから、先ほども出ましたが、2階は下が駐車場でピロティになっているから、相当、寒かったでしょうね。

東 | 寒かったですね。ただ、その前に住んでいた家も、育った家にしても昔ながらの木造で、断熱材が入っているわけではなくて、隙間風だらけの家でした。ですから、寒かったら何か暖かいものを上に着るとか、あんかを入れるとか、そういうことで対応していました。ただ、だんだん時代が進んでくると環境も変わるし、私たちも歳をとってきましたし。

古谷 | それと、キラー通りは徐々に車の交通量も増えて、音や排気ガスも多くなったとおっしゃっていましたね。

東 | ところが木製建具に変えたら、かなり音が消えましたね。驚くほど消えました。

古谷 | 僕は塔の家が、その後の日本の住宅に与えた影響は計り知れないものがあると思いますが、よく言われるのは、例えば安藤(忠雄)さんの住吉の長屋にしても、この塔の家がなければ生まれなかったかもしれないというぐらい、重要な伏線になっていると思います。その前は、菊竹(清訓)さんのスカイハウス、つまり都市住宅の流れでいうとスカイハウス、塔の家、住吉の長屋と物語られる。ところが、今言った塔の家にある不思議な外部の町の取り込み方みたいなものは、他の2つにはないんですよね。住吉にもないし、その後いろいろある都市の狭小住宅にもない。あの感覚はなかなかないなと思います。

東 | そうですか?

古谷 | そうなんです。例えばスカイハウスは、逆に、それこそ昔は音羽の辺りをずっと睥睨していたように思います。

東 | 今みたいに周りが建て込んでいなかったから、建った当時は、気持ち良く眺められたんじゃないかとは思いますね。

古谷 | スカイハウスから眺める感じと、塔の家に町が入ってくる感じは、全然違いますからね。塔の家の断片化した小さい階段の窓から、通りがかりにチラッと見える歩道の景色が、どれだけ中の空間に対して、大きな空間の広がりを感じさせてくれているか。あのアイデアは素晴らしく面白いと思っています。

独立…、塔の家が広告塔だった

古谷 | 新宿西口広場をやっていた時に、いずれ独立すると言い出して、その時に坂倉先生が「何かやる予定はあるのかね」と聞かれて「何もありません」と答えて、何もないのに独立しちゃったと聞きました。それにも驚きましたけど、実は塔の家が建った後の1967、68、69、70、71、72年という5、6年の間に相当数の住宅をなさっていますよね。パッと数えたら30軒近くあるような気がしたんです。坂倉先生が心配されるぐらいに何もなかったはずの仕事は、どのようにして依頼されるようになったんですか。

東 | ほとんどが塔の家を見て来られた方ですね。事務所を始めて最初の頃の「矢野邸(ホワイト・マジック・ボックス)」[1968]の設計途中で、初めて設計料をもらった時は、塔の家の階段を駆け上って家内に渡して、2人で跳び上がって喜んだのを覚えています。塔の家から後は、驚くようなスピードで動いていきました。塔の家が発表されてからは、まず、すぐにスタッフの希望者が増えてきましたし、仕事も入ってきて、忙しくなっていきました。

古谷 | やっぱり塔の家が一種の広告塔になったわけですね。後に、僕は雑誌で知るわけですが、センセーショナルでしたし、不可能を可能にしたような感じだったそうですね。

東 | 塔の家が出来上がったのが1966年で、70年には万博の「三井グループ館」が出来ているんですよ。その間、4年ですけど、その設計期間がありますから、

ほとんどが塔の家を見て来られた方です——東

栗辻邸※

ワット・ハウス※

塔の家に移り住んでから、本当にすごい勢いで仕事をしたんです。

古谷 | 坂倉事務所時代には、そんなに住宅はたくさんされていないでしょ? たしか、どちらかの会社の重役の方のお宅を担当されていたと思いましたけど。

東 | 大阪で牛谷邸を1軒やっただけです。

古谷 | そうしますと、住宅設計のノウハウは、すべて塔の家になりますか?

東 | ほとんど。ですから、お施主さんとのやり取りは、ほとんど塔の家以降の方たちなんです。粟辻(博)さんを始め、皆さん塔の家を見て、「何だか面白いぞ!」と言って、いらしてくれました。

古谷 | 最初は塔の家の効果だったでしょうが、その後、「粟辻邸」が1971年、「ワット・ハウス」は集合住宅ですけど77年頃になる。東さんは「住宅を中心にやっていくぞ」という気持だったんですか?

東 | もともと、公共建築の設計を修行してきたわけです。しかし、若い建築家が設計できるものは組織力を必要としない住宅ですから、独立する時には住宅がメインになると思っていました。ちょうど、私の世代ぐらいから住宅作家と呼ばれる建築家が育ってきました。『都市住宅』に発表した「共同作業論」[6]など、住宅はクライアントを含めて、みんなで議論しながら建築家が中心となってつくり込んでいける…。それは私にとって理想的な設計環境だと思いました。

古谷 | 住宅は1対1でできますからね。

東 | 面白いお施主さんが多かった。当時は粟辻さんとか酡島(庸二)さん、大山(昭子)さんとか、議論をして楽しい方というか、闘うような相手が施主だったんです。今とは本当にお施主さんが違っていた感じがしますね。それに、スタッフもほぼ同世代、ちょっと自分より若いくらいだから、スタッフともやり合っていましたし、良い意味で建築で遊んでいる研究所のような事務所でしたね。個性的な時代、クライアントもスタッフも個性的だった、そういう時代ですね。

古谷 | その頃に、竹山(実)さんや鈴木恂さんや宮脇(檀)さんたちと「ARCHITEXT(アルキテクスト)」というグループをつくられましたよね。あれは、一体どういう活動だったんですか?

東 | これも、住宅を中心に設計している建築家の課外

[6] 特集:東孝光建築研究室・共同作業論『都市住宅』1969.8

清仁保育園
所在地:京都府城陽市富野乾垣内67
設計:東孝光建築研究所
敷地面積:2,044.73m²
建築面積:441.38m²
延床面積:648.79m²
規模:地上2階
構造:RC造
工期:1973.8–1974.5
–
中庭越しに見る

清仁保育園森の舎(いえ)
所在地:京都府城陽市富野乾垣内3–8
設計:東孝光+東環境・建築研究所
敷地面積:821.18m²
建築面積:439.30m²
延床面積:831.40m²
規模:地上2階
構造:RC造
工期:1999.4–2000.2
–
上——ホール見通し/下——北面全景

[7] 東孝光「複合的なるものへ」『日本現代建築家シリーズ4―東孝光(新建築別冊)』1982.4

スリットシリーズ:
上から――榎本邸※/勝見邸※/岡畑邸※

利恵さんと協同で事務所をなさるのは、東さんが阪大に行かれることに決まったからですか?――古谷

活動のようなものでした。メンバーは竹山実、鈴木恂、宮脇檀、相田武文と私で、原宿、千駄ヶ谷、新宿近辺に住んでいる5人の同世代の建築家でつくったグループです。「スローガンは立てないぞ」ということを表明するグループ…とでも言いますか、スローガンを立てて啓蒙しようとするエリートではない。そういう運動は得てしてうさん臭くて、建前と現実が違っているじゃないか…、というところです。ポスターをつくって、2回くらいは通信もつくったりしました。建築の雑誌でも特集を組んでもらいました。

古谷 | みんな都心に住んでいることと、若いということもあって、結構、元気でしたよね。

東 | 例えば、私はヌード写真を横から撮って、それをシルエットに加工してポスターをつくったりしたんです。今も事務所のどこかに貼ってあると思いますが、そういう建築と遊びの狭間みたいなことを、このグループはやっていたんです。

古谷 | あぁ、それは雑誌で見たのを今でも覚えています。ずいぶん面白そうでしたが、ずっとそういう活動をされようと思っていたのですか?

東 | 時代も変わってきて、かなりの数の住宅を設計してみますと、1対1の勝負から抜け出て、そろそろ住宅じゃない公共建築をもう一度やってみたいと思うようになりました。

古谷 | そろそろというのが、正直なお考えだったかもしれませんね。

東 | 公共建築の環境も変わってきましたし、私も若造でなくなった。この辺りで大勢の人々がかかわる建築に取り組んでみたいと考えるようにもなってきたんですよ。

古谷 | なるほど、そうだったんですか。

コンクリート打放しの魅力は、均質でないこと…にある

古谷 | 僕が最初に東さんに会ったのは、早稲田の理工学部で、当時、理工学部展という地味な学園祭を11月にやっていたんです。学生が自分たちでドーム空間のようなものをつくって、そこに建築家を招いて講演を頼んだりしたんです。学生企画でやるもので、僕が大学院ぐらいだと思うんですが、覚えているのは、宮脇さんと鈴木恂さんと東さん、相田さんが、ドームの中で講演をされた。宮脇さんが最初にすごく華麗なスライドをなさって、次に東さんがご自分の1970年代後半におつくりになった住宅を映された。その時に、宮脇さんが「東さんは相変わらずキタナイ打放しをつくっているな、俺はきれいだよ」と発言なさったんですよ。宮脇さんは口が悪いなと思って、でも妙にライブ感があったので覚えているんです。その時、東さんは「それはそうなんだけど…」みたいなことをおっしゃって、あまり強くは反発されなかった。

東 | キタナイ打放し…というのは、おそらく「榎本邸」[1979]とか「勝見邸」[1981]、「岡畑邸」[1981]などのスリットシリーズの住宅か、それ以前のものだと思いますが、きれいというものは、そのまま、ある種の弱さみたいなものにつながっていると、自分としては思っています。

古谷 | そうですか。今回、対談の資料をいろいろ読んでいたら、あの時の講演会の時のことを急に思い出したんです。打放しコンクリートのきれい、キタナイっていうのは、東さんにとってはどういうふうに判断されていたのか、ぜひ伺おうと思いました。

東 | コンクリートの場合、“きれいである”ことが、いつからか“均質である”ことになってしまった。しかし、私はコンクリート打放しの魅力は、“均質でないこと”にあると思っていました。型枠の木目や小さな凹凸、補修跡でさえ人間の手の跡を感じさせてくれますし、そこには温かみがあり、力強い表情があり、時間の経過と共に味わいにもなると考えていたわけです。早稲田の講演会のことは私は忘れてしまいましたが、宮脇さんから「キタナイ打放し」と言われたとしても、それは、お互いに何を重要視するかという価値観の違い、建築家の個性の違いとして認め合っていましたから、あえて反論する必要もない仲だったわけです。

古谷 | 僕も同じことを思うんです。ただ、きれいきれいっていうものに弱々しさを感じるのと同時に、何というんですか、ものが持っている素材感とか、そのもの本来が持っている表情とか、それが直接ぶつかり合っている、組み合わさっている…、ややゴツゴツするかもしれないけれど、そういう生の素材が持ってる力強さ、そういうことですよね。コンクリートにしても、鉄にしても、木にしても、石にしてもしかりなんですね。東さんはそういうものが、あんまり上手に整えられないで、少しギシギシとぶつかり合っている状態を、その後もずっと良しとされていた感じがします。とにかく“きれいなものは弱い”という独自の解釈を持っていらっしゃるのは、なかなか面白いと思いました。

もう一つ、“要素の複合化”についてお伺いします。「羽根木の家」は1982年ですから、講演会の時より後になると思うんですけど、複合化するものに対する興味について書いてあります[7]。その時にひとつの空間の中にいろんな人がいる、いろんなものがあるということを、“ポリフォニックな空間”と説明されています。たぶん、この頃から使われたんじゃないかと思うんですけど、東さんとして、これはどういうところからきたと考えていらっしゃいますか? 複合化というようなものに至った経緯ですね。

東 | 空間の複合性というのはスリットシリーズから考えていましたが、“ポリフォニック”という言葉は、羽根木の家で見つけた言葉です。というのは、ここは社会学の視点から音楽を研究されている大学教授の家だったんですね。ただ、クライアントが研究のためにヨーロッパに留学されている間に、ほとんど手紙のやり取りで設計しているんです、設計から施工まで。直接、お会いすることが他の施主と比べて少なかったんです。この方から、ポリフォニックという言葉を教えてもらいました。

古谷 | どういう意味だったのでしょうか。

東 | 私はポリフォニックというのは、幾つもの旋律が個々に奏でられながら、全体としては大きな1つの曲になっていくという意味に解釈していました。建築の空間も同様で、1つの建築、または空間の中には複数の異なる要素が混在し、主張している。しかし、空間を体験する人はそれぞれ独自の要素を感じることができる…、そういうポリフォニックな世界を目指していた。建築を設計する時には、相反するようなことを幾つも両立させることが必要で、それを複合的と言う人もいるけれど、私にとっては相対することも両者それぞれに大事だと考えて、この言葉を使っていました。

古谷 | 単に複数なものが響き合うだけでなく、多様な他者ということですね。

利恵さんと親子の共同設計がスタート

古谷 | 話が少し前に戻りますが、娘の利恵さんと協同をすることになりますね。これは1985年に、東さんが阪大の教授になられる時に、事務所を利恵さんとの協同というか、むしろ代表が利恵さんになるという組織変更をされるわけですが、そもそも阪大に行かれるのは、どういうきっかけですか?

東 | 当時は、幾つかの大学に非常勤で教えに行っていましたが、阪大の環境工学科に来ないかという話があり、時間をかけて教えたり、また同時に学んでいくことにやりがいがあると考えました。

古谷 | 当時、利恵さんは留学中ですよね。

東 | 娘はアメリカに留学していたんですが、電話をして「今度、阪大に戻ることになったんだけど…」という相談をしたんです。まぁ、呼び戻したことになりますね。

古谷 | 一緒に事務所をやらないかと。

東 | そうです。娘は寝耳に水で、考えてもいなかった。本当は1年くらいはアメリカの事務所で研修したかったらしいのですが、数日考えた後、賛成してくれました。親としては、海外にいたから言いやすかったのかもしれないし、娘も海外にいたから決心できたのかもしれない。良いチャンスになるかもしれないと思ったらしいです。恵まれている部分は恵まれたままでいこうと割り切ったと、後で聞きました。

古谷 | そろそろ帰って来いって言いたかったんじゃないかなという気もしないではないですが…。それで協同事務所にして、最初が「大原のアトリエ」[1988]の仕事だったんですよね。

東 | そうです。

古谷 | そこからおふたりの共同の仕事が始まるわけですが、たぶん最初は、東さんはすでにベテランで、利恵さんはこれからやろうというところですから、だいぶ差があったかと思うんです。これは聞いていいのかどうか分かりませんが、最初の親子の協同設計というのはうまくいったんでしょうか?

東 | 見守る感じでやりましたから、娘は自由に自分でやっていました。ただ、頭でっかちなところもあって、納まらない部分とか、実際に建つ時になったら問題が出てくるであろうところは助言をして、なるほどと気づかせるようにしたところもたくさんあります。

古谷 | じゃあ、案はむしろ利恵さんが主導でつくっていったんですね。

東 | そうです。スケッチや図面は全部、娘が描いて、私が意見を言って、また練るという連続でした。

古谷 | クライアントとの打ち合わせは?

東 | それは2人で出ました。2人で出る時は、基本的に私は娘に説明させるようにしました、その後もずっと…。時には補足することもありましたけれども。それと最初の大原のアトリエは、蔀島さんという芸術家の方で、私の設計は3軒目[8]の方でしたから、娘は小さい頃から知っている人でしたし、案を大変気に入って下さった。だからこその闘いみたいなところもあって、娘は言ってみれば、お施主さんとも闘い、私とも闘い、コストとも闘っていました。怖いもの知らずで、何とかやっていましたね。

古谷 | それはすごい“on the job training”、実地のトレーニングですね。

東 | そうですね。娘はこの1軒を設計したことで、かなり覚えたと思います。1軒に数軒分が詰まっていた感じでした。

闘うクライアント「阿佐ヶ谷の家」

古谷 | 「阿佐ヶ谷の家」[1993]のねじめ(正一)さんは、どういうタイプのクライアントだったんですか。

東 | ねじめさんは信念を求めるクライアントで、昔の闘う

大阪大学に戻ることになって、留学中の娘を呼び戻したことになります――東

[8] 1軒目:蔀島工房[1970]、2軒目:蔀島邸[1980]、3軒目:大原のアトリエ[1988]

羽根木の家[写真:新建築社写真部]

大原のアトリエ[写真:栗原宏光]

クライアントと同じでしたね。

古谷 | どうやって頼みに来られたんですか。

東 | 紹介者を探されて、突然やって来られた。それも塔の家があったからなんです。古谷さんも会われていますよね…。

古谷 | 取材でご自宅に伺いました。

東 | 最初に「とにかく闘っていることを大事にしたい。闘ってほしいんです」というところから始まりました。塔の家での暮らしは、そんなに闘っているつもりではなかったのですが、そういうことなら闘っていきましょう…みたいなことで始まったと思います。

古谷 | やっぱり、ねじめ正一さんという独特のクライアントがいて、ご家族も含めてみんな個性があったので阿佐ヶ谷の家が出来たとおっしゃっていますけど、確かにそれまでに設計された住宅では、どちらかと言えば、自己完結型の形は少なかったと思います。阿佐ヶ谷の家は角地にあって、プランも正方形で、円形の吹抜けはあるし、とんがり屋根もピラミッド的だし、そういう意味で言えば、ある強い形をまとっていた。これはクライアントからの要望ですか。あの形の提案、つまりあの丸い吹抜けなどは…。

東 | あの提案はこちらサイドです。ただ、1／30か1／20の模型を2つつくり、2つの案を提案しました。小さい敷地の中にどうしても車だけは入れたいという話もあったり、かなりの制約がありましたので、内部も含めて2つの案をつくって持って帰っていただいたんです。ひとつは今の案、もう一つは丸い吹抜けも中心性もない案でした。それで内部空間を見ていただいて、どちらにするかを検討して選ばれたのが今の案です。

古谷 | 求心的なものですね。ねじめさんはもともと阿佐ヶ谷だから、ある種の町ではありますが、ちょっと青山辺りの町とは違うタイプで、もっと庶民的な感覚がある町ですよね。

東 | そうです。青山の辺りとはちょっと違って、商店街のある沿線住宅地なんですよ。住宅地の中なので、塔の家のように外に向かって開くという感じの町ではありませんでしたから、内部に向かって開く。結局、ねじめさんは住まわれてから、「闘うというのは、内部で家族で闘うんだ」みたいにおっしゃっていました。

古谷 | キラー通りとは違って、やや庶民的な商店街のある阿佐ヶ谷の風景は、東さんから見るとどういうふうに見えたんですか?

東 | 阿佐ヶ谷は、JRの沿線住宅地と、その駅を中心に発展した商店街の町なんですよね。私の育った大阪の町は、商店や住宅などが混在しているんです。そこが少し違っていました。それでも、商店街はどこか戦

阿佐ヶ谷の家
所在地:東京都杉並区
設計:東孝光+東環境・建築研究所／東利恵
敷地面積:84.16m²
建築面積:49.22m²
延床面積:129.65m²
規模:地上3階
構造:RC造、一部S造
工期:1993.2–1993.8
–
左ページ――2階居間から吹抜けを見る／
左――1階ホールから吹抜けを見上げる／
右――北西面全景
［写真3点とも:栗原宏光］

上――さつき保育園[写真:鈴木悠]/
下――清心保育園※

後を思わせる共通のにおいがありました。

ゆっくりの受賞だった学会賞

古谷 | 東さんは、塔の家から始まって、この阿佐ヶ谷の家までの一連の住宅で学会賞を取られますね。みんなが「ずいぶんゆっくりだったな」みたいなことを言ったように思いますが、学会賞を取られた時は、正直どういう感想だったんですか?

東 | 家族3人で、淡々と受け止めていました。

古谷 | そうですか。

東 | というのは、何度も候補に挙がっているんです。現地審査も何度もありました。竣工した頃は、反発的な意見もあったようですが、そのうちだんだん評価が追い付いてきたのだと思います。「これは取っていないのはおかしい」と考えて、推薦をして下さったんだろうと思います。何だかあってもなくても同じような気もしましたが、頂ければうれしい。しかし、最初にノミネートされた頃よりは、冷静に受け止めていた感じはしましたね。

古谷 | そうでしょうね、きっと。

東 | 結局"一連の住宅"ということで頂けたのが、一番うれしかったですね。

古谷 | でもたしか、その間、100戸つくられたとおっしゃっていましたか?

東 | 150戸以上つくっているんじゃないですか。

古谷 | それが東さんの場合には、"何とか的建築"というような表現をされることが少なくて、どうしても塔の家のイメージが強すぎるところがありますね。それだけインパクトがあったわけですが…。結局、塔の家は建築、そして設計者、あるいはユーザーとしてのかかわり方に対して、関心を持つきっかけになったそうですね。ご自身も含めたご家族のことですね…。

東 | そうなんです。以来、ずっと建築というのは、ユーザーが自分で発見し、見い出していく部分が必要で、使い方とかいろんなことに対しては、融通性を持っておくべきだという感覚につながっています。

古谷 | 「人々が建築を通じて生き生きと生活するのが美しい」って書いていらっしゃいますね。これは結構強い言葉だなと思います。最終的にはユーザーの生き方を建築にするんだということですね。塔の家以降は人生を通じてひとつのテーマになっていったとおっしゃっていますからね。

東 | 建築家は住み方の定義をするのではなくて、たくさんの可能性を引き出して、住み手に発見してもらうことが大事だと思います。

古谷 | この対談のために、いろんな資料を一とおり最初から辿ってみますと、さっきから時々お話している子どもの頃の原風景みたいなものが、一種のDNAのようにずーっとつながっている感じがすごくします。その中に今の"ユーザーの生き方を形にする"という、そういうものがずっと心棒…、というほど仰々しくではなく、何となくずっとちゃんと染み込んでいる、そういう感じがしました。

1960年代から現代まで…「清仁保育園」

古谷 | 「さつき保育園」[第1期:1969、第2期:1973、第3期:1976]を始め、「清仁保育園」[1974]と「清心保育園」[1980]など、いわゆる子どもの空間を設計していらっしゃいますね。

東 | さつき保育園は建て替えで壊されました。清仁と清心は今もお付き合いがあって、メンテナンスもやっています。

古谷 | 清仁保育園と清心保育園は関係あるんですか?

東 | 今はそれぞれを姉妹の方とその親族の方がやられていて、もともとは、そのお母さまの時代からやっていらっしゃったんです。

古谷 | 今まで主に住宅のことでお話を伺ってきましたけど、東さんの場合は時々、集合住宅化することもあるし、それからさつき保育園に始まって、保育園もずっとやっていらっしゃる。これは住宅と紙一重ですよね、子どもにとっては住まいみたいなものですから。

東 | そうですね。保育園とか子どもの空間というものをずっと考えてきました。それがずっとつながっていて、ちょうど2000年には「清仁保育園森の舎(いえ)」をして、クライアントとの付き合いもずいぶん長くなりました。

古谷 | 清仁保育園の最初のもの、1974年につくられる時に、その園長先生のお考えで、保育年齢に縛られないで、できるだけ中で自由に子どもたちが自分の居場所や行動を発見できるようにしたいという理念があったそうですね。それに東さんは共感されたと資料に書かれている[9]。東さんには『住まいと子どもの居場所』[10]という著書もあるんですよね。本当は読んでから来なきゃいけなかったんだけど、ちょっと探せなくて、まだ読んでいないんです。子どもの居場所というのは、東さんから考えるとどういうところだったか、あるいはどうあってほしいとお考えになっていますか?

東 | その辺は、子どもの頃に遊んだ焼け跡の思い出がすごく強いんです。ちょっとした隠れ家とか、秘密基地とか、そういったものが幼稚園の中に点在していて、子どもの視線とか、そこかしこにあいている穴とか、そういうことが原点になっていると思います。住宅でも小さいお子さんがいる場合は、どこかにそういうところがありますよね。粟辻邸も、家具を動かして子どもコーナーをつくれるようにしています。「動く家具シリーズ」もつくりました。子ども部屋を動く家具で分けるとか、家具を動かして子どもたちが自分たちの空間をつくれるのは、子どもにとってすごく楽しくてワクワクする感じがありますよね。「梅澤医院」[1971]の子ども部屋もそうです。3人姉弟のスペースを、動く家具を組み合わせることで、いろんな使い方に変えられるように設計しています。

古谷 | すごく共通性がありまして、東さんはあんまり分けて考えていないんじゃないかという気もするんです。住宅には子どもが付きものだし、子どもの空間が保育園に展開した時にどうなるのか。それが森の舎の時には、真ん中に大きな吹抜けのスリットスペースを取られた。それによって流動的な空間が生まれたと、うれしそうに書かれていたように記憶しています[11]。その空間の中にある流動感ですが、これも無理やりこじつけると、原点はライトにあったりする…。そう思ったことはないですか?

東 | それはないですね。私はライトより、やはりル・コルビュジエの方が圧倒的に好きなんです。空間の流動性もル・コルビュジエの方があると思っています。

古谷 | そうですか。それは勘が外れました。

では最後の質問ですが、今は利恵さんは「星のや」さんを始め、いろいろな仕事が順調に進んでいると思いますが、今後は利恵さんにどんなものをつくってほしいとお考えですか?

東 | 自分の思うように進んでほしいと思いますね。私の後を追う必要はないですからね。

古谷 | いかにも良い父親を感じさせる言葉ですね。ありがとうございました。ご療養中に無理なお願いをいたしまして申し訳ありません。でも、おかげさまでとても貴重なお話ををたくさん伺うことができました。重ねてお礼申し上げます。

また、誌上対談という困難な作業の仲介をしていただきました東利恵さんにも、本当にご苦労をおかけしてしまいました。どうもありがとうございました。

[9] 東孝光「清仁保育園の設計について」『新建築』1974.10
[10] 『住まいと子どもの居場所100章』東孝光著[鹿島出版会/1987]
[11] 東孝光「清仁保育園森の舎」『新建築』2003.1

[取材協力]
●東 環境・建築研究所
●清仁保育園
–
[その他]
東孝光氏のポートレートと※印の写真は、
東 環境・建築研究所提供。
特記のない写真は撮り下ろしです
–
[次号予告]
「INAX REPORT No.190」の
「続々モダニズムの軌跡」は
安藤忠雄氏です

塔の家を案内する東利恵氏(左)と古谷氏

[対談後記]

大阪から東京、街をわが家にした建築家

古谷誠章

–

「ネコのひたいに建った家」、たしかそんな副題がついていたと記憶している。もう20年以上前に板橋区立美術館で開かれた「都市に棲む」展、企画は植田実さん。鈴木恂さんの時にも触れた『都市住宅』誌の元編集長であった。副題は展覧会全体のものだが、明らかに「塔の家」を意識してつけられたとしか思えない。会場の床には、「皆さん想像できないでしょう」とばかりに、この家の原寸大の平面図が描かれていた。知らない者は誰もいない日本戦後住宅の代表作だ。

だが、不勉強な僕は、昔、通っていた自分の高校のすぐそば、実は隣の中華そば屋まで度々行ったにもかかわらず、この家の存在に気づかずにいたのである。それほど街に同化していたのだと思う。竣工当時は周囲から屹立していたことは、雑誌の写真で知った。しかし、今回の誌上対談を通して、実は家が街に同化していたのではなく、東孝光さんが周囲の街の方をすべて自分の家にしていたんだと思えてきた。幸い、東さんの"家の一部"であった喫茶店の「レオン」の方は、当時の僕も共有していて、僕も必ずコーヒーを2杯飲んだ。残念ながら今はもうない。

東さんのそんな街の住みこなし術は、やっぱり子ども時代から身につけていたものだ。大阪の街の真ん中に生まれ育ち、大勢の姉妹や弟との賑やかな家族生活、そして焼け跡の探検などを通して、街全体をわが家にする暮らしをしていたのだと思う。東京に出て来てからも、当然その思いは強かったから、必然的に「塔の家」の建設に行き着いた。以前に1度取材で訪ねた時に、僕は初めてこの家の窓を体験している。階段やその他の場所にさりげなくあけられた、まるでトーチカの覗き穴のような小さな窓からは、街路樹の梢の緑や、キラー通りを行く街の人々の姿が見える。都会の断片を吸い込むような窓だった。

今回は残念ながら直接お話を伺うことができなかったが、一方的な質問にもとても丁寧に答えていただいた。根気よく仲介して下さった東利恵さんともども、どうもありがとうございました。

–

ふるや・のぶあき――
建築家・早稲田大学教授
1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。
1980年、同大学院博士前期課程修了。
1986年から1年間、
文化庁芸術家在外研修員として
マリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。
近畿大学助教授を経て、
1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。
1997年から現職。
主な作品:
アンパンマンミュージアム[1996]、
詩とメルヘン絵本館[1998]、
早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、
ZIG HOUSE/ZAG HOUSE[2001]、
近藤内科病院[2002]、
神流町中里合同庁舎[2003]、
茅野市民館[2005]、
高崎市立桜山小学校[2009]、
小布施町立図書館「まちとしょテラソ」[2009]、
早稲田大学理工カフェ[2009]、
鶯庵[2009]、
T博士の家[2010]など。

特集2｜年譜

東孝光作品年譜

主な作品

［竣工・計画年／作品名／所在地／掲載誌］
［○］は現存せず｜［◎］は計画案
1988年以降の作品については東利恵との協同による作品を含む

1964 ◇チェック宝塚店Ⅰ［兵庫］
「インテリア」1964.11｜「店舗」1979.5
◇チェック新宿店［東京］
「インテリア」1964.11｜「商店」1965.2｜「建築」1966.10｜「近代建築」1969.4｜『商店建築デザイン選書1』[商店建築社／1970]｜「店舗」1979.5
1965 田中邸（増改築）［大阪］
◇チェック日本橋店［東京］
「インテリア」1965.9｜「商店」1965.9｜『商店建築デザイン選書3』[商店建築社／1970]
1966 塔の家［東京］
「新建」1967.1／1976.11（臨時増刊，昭和住宅史）／1978.11（臨時増刊，日本の現代建築）｜「建築」1967.6／1972.1｜「都住」1968.7／1982.1｜「日本の現代住宅Ⅰ」[彰国社／1969]｜「ML」No.78,1971.9／No.81,1972.3｜「GA HOUSES」No.4,1978.10｜「住建」1980.1
1967 ◇チェック北新地店［大阪］
「都住」1969.8｜「店舗」1979.5
◇赤塚山荘［長野］
「都住」1968.7｜「セカンドハウスⅠ」[工業調査会／1972]｜「ML」No.81,1972.3｜「住建」1980.4
1968 川本邸［大阪］
「文化」1968.7｜「都住」1968.7｜「日本の現代住宅Ⅰ」1969｜「住建」1980.6
矢野邸（ホワイト・マジック・ボックス）［東京］
「文化」1968.9｜「都住」1968.9｜「日本の現代住宅Ⅰ」1969｜「家庭画報」1977.7（別冊）｜「住建」1980.1
ダイヤモンドビル［大阪］
「都住」1969.8
里屋邸［大阪］
「新住宅（新住宅社）」1968.4｜「都住」1968.7
中原邸［兵庫］
「文化」1969.6｜「都住」1969.8
◎NMS（ねむの郷計画）［三重］
1969 ◇福永・宮田邸［大阪］
「文化」1969.8｜「都住」1969.8
◇太陽堂ビル［京都］
「都住」1969.8
◇さつき保育園第1期［大阪］
「文化」1969.7｜「都住」1969.8
中村医院［大阪］
「文化」1971.7｜「都住」1971.9（臨時増刊，住宅第1集）｜「建築」1972.6
井上邸［神奈川］
「都住」1969.8｜「文化」1969.12｜「住建」1980.2
横田山荘［静岡］
「都住」1969.8｜『セカンドハウスⅠ』1972
◇赤塚邸（大阪探検基地）［大阪］
「文化」1970.8｜「近代建築」1970.9｜「新建」1970.9｜「都住」1970.9｜「JA」1970.11｜「住建」1980.1
1970 大山邸（カサビアンカ）［大阪］
「近代建築」1970.9｜「建築」1970.9｜「新建」1970.9｜「都住」1970.9｜「インテリア」1970.10｜「JA」1970.11｜「ML」No.81,1972.3｜「住建」1980.1
小諸自動車教習所［長野］
◇日本万国博覧会・三井グループ館［大阪］
「JA」1969.4｜「インテリア」1970.2｜「文化」1970.4｜「新建」1970.5
葭島工房［千葉］
「都住」1969.8／1972.6（臨時増刊，住宅第2集）｜『セカンドハウスⅠ』1972｜「建築」1972.6｜「住建」1980.4
加納邸［岐阜］
「都住」1971.9（臨時増刊，住宅第1集）｜「建築」1972.6｜「家庭画報」1977.7（別冊）｜「住建」1980.2
川辺邸［神奈川］
「新しい住宅（実業之日本社）」1971夏｜「都住」1971.9（臨時増刊，住宅第1集）｜「ML」No.78,1971.9／No.81,1972.3｜「建築」1972.6
1971 高橋邸［兵庫］
「都住」1971.9（臨時増刊，住宅第1集）｜「ML」No.81,1972.3｜「建築」1972.6
◇ブティック・コアラ［長野］
「都住」1971.9（臨時増刊，住宅第1集）｜「建築」1972.6｜「店舗」1979.5
泊船軒庫裡［東京］
「文化」1971.7
梅澤医院［東京］
「文化」1971.7｜「都住」1971.9（臨時増刊，住宅第1集）｜「建築」1972.6
町田山荘［群馬］
「都住」1971.9（臨時増刊，住宅第1集）｜『セカンドハウスⅠ』1972｜「建築」1972.6｜「家庭画報」1977.7（別冊）｜「住建」1980.4
粟辻邸［東京］
「新建」1972.2｜「建築」1972.6｜「JA」1972.6｜「都住」1972.6（臨時増刊，住宅第2集）｜「ML」No.83,1972.8／No.94,1975.5｜「家庭画報」1977.7（別冊）｜「住建」1980.2
◇伊藤邸［神奈川］
「建築」1972.6｜「都住」1972.6（臨時増刊，住宅第2集）｜「家庭画報」1977.7（別冊）｜「住建」1980.2
チェック阪急三番街店［大阪］
◎薬師寺計画（仮設会場計画）［奈良］
首都高速道路公団大井埠頭および13号地換気所（建築意匠設計）［東京］
1972 楠本邸［東京］
今枝邸（増築）［兵庫］
エアシップボウリングセンター［大阪］
高石自動車教習所本館［大阪］
町田邸［東京］
「ML」No.86,1973.5／No.90,1974.5／No.94,1975.5／No.100,1976.11｜「文化」1973.9｜「住建」1980.3
山道邸（父）［神奈川］
1973 荒木邸［東京］
「都住」1973.7（臨時増刊，住宅第4集）
住野邸［兵庫］
「ML」No.90,1974.5
◇さつき保育園第2期［大阪］
「近代建築」1973.5｜「新建」1973.5｜「都住」1973.7（臨時増刊，住宅第4集）｜「JA」1973.11
西村邸［神奈川］
「都住」1973.7（臨時増刊，住宅第4集）
◇陳邸［東京］
「都住」1973.12（臨時増刊，住宅第5集）｜「インテリア」1974.7
町田文化幼稚園［東京］
◇レストラン・サンバード銀座店［東京］
「インテリア」1973.8｜「商店」1973.8
西武八ヶ岳山荘［長野］
「都住」1973.12（臨時増刊，住宅第5集）
荻田邸［神奈川］
「インテリア」1974.7｜「住建」1980.3
皆川邸［奈良］
安丸邸［兵庫］
「ML」No.90,1974.5／No.94,1975.5｜「ハウスプラン（産報出版）」1975.4｜「家庭画報」1977.7（別冊）｜「住建」1980.3
山道山荘［長野］
「新建」1974.8｜「JA」1974.11・12｜「住建」1980.4
1974 ◇御代田町福祉センター［長野］
「文化」1974.4｜「新建」1974.4｜「JA」1974.7
山崎邸［静岡］
「新建」1974.8｜「JA」1974.11・12
御代田第4保育園［長野］
「文化」1974.7
板谷邸［東京］
「都住」1975冬（別冊，住宅第8集）｜「ハウスプラン」1975.4｜「家庭画報」1977.7（別冊）｜「住建」1980.3
石川邸［神奈川］
清仁保育園［京都］
「新建」1974.10｜「JA」1975.2
◇荒木邸［東京］
◇松本邸［神奈川］
「都住」1975冬（別冊，住宅第8集）｜「ML」No.93,1975.2／No.94,1975.5｜「ハウスプラン」1975.4｜「新しい住宅」1976.7｜「住建」1976.9｜「家庭画報」1977.7（別冊）
大戸医院＋住宅［埼玉］
「店舗」1977.1｜「日経メディカル」1977.10.25｜「新しい住まいの設計（サンケイ出版）」1977.12
平邸［神奈川］
「都住」1975冬（別冊，住宅第8集）｜「ハウスプラン」1975.4｜「住建」1980.5
大沢邸［東京］
「都住」1975冬（別冊，住宅第8集）｜「インテリア」1976.7
青木邸（兄）［東京］
水野邸［兵庫］
「都住」1975冬（別冊，住宅第8集）｜「ML」No.93,1975.2／No.94,1975.5
吉祥寺豆腐（とうふ）［東京］
「商店」1975.2
◇カレーの王様京橋店［東京］
◇カレーの王様岩本町店［東京］
◇カレーの王様神田店［東京］
◇カレーの王様新宿店［東京］
1975 富士急東京営業所［東京］
「都住」1976.6
吉田邸［埼玉］
「新しい住宅」1976.7｜「住建」1980.6
蕎麦おおさわ［東京］
「商店」1975.11
山田邸（愛知）
章本邸［大阪］
「週刊新潮」1976.5.6｜「新しい住宅」1976.7｜「インテリア」1976.7｜「家庭画報」1977.7（別冊）｜「住建」1980.5
◇アッサムお茶の水店［東京］
「店舗」1977.7
柿崎邸（増改築）［東京］
◇カレーの王様銀座店［東京］
◇カレーの王様東劇店［東京］
◇カレーの王様八王子店［東京］
1976 段塚医院［埼玉］
「日経アーキテクチュア」1976.10.4
◇元麻布の家（松田建物研修所）［東京］
「日経アーキテクチュア」1976.5.31｜「住建」1980.6
◇O&O月島店［東京］
「インテリア」1976.4｜「商店」1976.4
◇さつき保育園第3期［大阪］
「店舗」1977.3
高橋邸［神奈川］
山道邸［神奈川］
「文化」1977.2
頴川邸（甲東園の家）［兵庫］
「新建」1976.9
土井邸（改築）［兵庫］
1977 坊邸［東京］
山上邸［神奈川］
「都住」1977.12｜「住建」1980.5
◇増田邸（増改築）［京都］
◇米澤ビル［京都］
「日経アーキテクチュア」1978.6.12｜「建築知識」1980.3
ワット・ハウス（4戸の住宅集合）［福島］
「新建」1978.4｜「都住」1978.4｜「JA」1978.8｜『日本の低層集合住宅』[鹿島出版会／1982]
1978 清仁運動舎［京都］
◇アッサム国分寺店［東京］
「店舗」1979.5
◇チェック宝塚店Ⅱ［兵庫］
「店舗」1979.5
渡辺邸（ピアノの家）［神奈川］
「都住」1979.2｜「週刊新潮」1979.3.22｜「ハウスプラン」1980.1／1981.11（別冊）｜「住建」1980.5｜「どりーむ（どりーむ編集局）」No.199,1981.3｜「クロワッサン」1981.6｜「週刊文春」1981.10.8｜「ML」No.16,1982.1
氏家邸［埼玉］
◇おおさわ平林寺店［埼玉］
「店舗」1979.5
青木邸（弟）［東京］
伊勢原自動車学校（増改築）［神奈川］
1979 福地邸［福島］
「住建」1979.9／1980.6
村松邸［千葉］
「家庭画報」1980.6
榎本邸［神奈川］
『アサヒハウジングフェア No.12―住まいと家具』[朝日新聞社／1980]｜「週刊新潮」1980.12.25｜「新建」1981.8｜「ML」No.14,1981.9｜「JA」1981.10
たくみ山荘［長野］
浜村邸［京都］
1980 小沢邸［茨城］
「日経アーキテクチュア」1980.7.21｜「住建」1980.9｜「ML」No.11,1981.3
伊藤邸［新潟］
「ML」No.9,1980.11
清心保育園［京都］
「新建」1981.12
吉比邸（きひ）［千葉］
葭島邸［千葉］
1981 高橋邸［兵庫］
多摩丘陵の家［東京］
山本邸［兵庫］
「新住宅」1982.1
小日向の家［東京］
勝見邸［埼玉］
「新建」1981.8｜「ML」No.14,1981.9｜「JA」1981.10
岡畑邸［大阪］
「新建」1981.8｜「JA」1981.10
泊船軒（増築）［東京］
日本パプテスト教会連合センター［東京］
「新建」1982.3
木島邸［長野］
上野原の家［山梨］
1982 羽根木の家［東京］
◇聖書キリスト教会・高田馬場会堂［東京］
1983 青山のアトリエ［東京］
「JA」1984.9
1984 大森の家［東京］
1985 志賀町の家［滋賀］
大和郡山の家［奈良］
鎌倉の家［神奈川］
◇元麻布の家［東京］
橋本パプテスト教会［和歌山］
「JA」1985.1
◇廿日市住宅公園展示館［広島］
1987 クラシックカーガーデン休憩舎［静岡］
「JA」1987.10
1988 大原のアトリエ［千葉］
「新建」1989.1｜「住特」1989.4
1989 筑波のアトリエハウス［茨城］
「住特」1989.5
雲井町の家［兵庫］
「住特」1989.7
小野路の家［東京］
「住特」1989.7
富野住の家［京都］
「住特」1989.12
1990 山手町の家［兵庫］
「住特」1990.4
1991 Kフラット［東京］
「住特」1992.5
JR西日本大阪駅中央コンコース改装［大阪］
白老の家［北海道］
「JA」1993.8｜「住特」1993.8｜「住建」1995.5
1992 西宮市立東山台幼稚園［兵庫］
大阪大学工学部情報システム工学科校舎［大阪］
喜山ビル［東京］
1993 阿佐ヶ谷の家［東京］
「住建」1995.5
大阪大学医学部・歯学部献体慰霊碑［大阪］
北白川の家［京都］
「JA」1993.3｜「住特」1994.5｜「住建」1995.5
ニューホシノ・コテジ改装［長野］
遊ハウス［東京］
村上邸［兵庫］
鶴原邸［東京］
1994 御代田の家［長野］
「住建」1995.5
三岳の山荘［長野］
喜山邸（台成商事社宅）［東京］
八風の郷山荘［長野］
開田高原の家［長野］
松丘・麻田邸［東京］
1995 ホテルプレストンコート［長野］
「日経アーキテクチュア」1995.6.12（増刊）｜「新建」1995.7
姫路工業大学書写紀念会館［兵庫］
「新建」1996.3
1997 御宿の家［千葉］
「住特」1998.10
1998 下総中山の家［千葉］
「住特」1999.1
黒郷の方庫［兵庫］
「新建」2000.2
2000 清仁保育園森の舎（いえ）［京都］
「新建」2003.1
2001 ◎大連集合住宅計画［中国］
奈良町の家［奈良］
2002 ◎仁川の家プロジェクト［韓国］
2003 長生の家［千葉］
八雲プロジェクト（デザインコンサルタント）［東京］
2004 JR西日本大阪駅東コンコース改装［大阪］
2005 御坊の家［和歌山］

主な受賞

1982 SDレビュー｜聖書キリスト教会・高田馬場会堂
1984 SDレビュー｜橋本パプテスト教会
1987 SDレビュー｜大原のアトリエ（東利恵と協同）
1995 日本建築学会賞作品賞｜塔の家から阿佐ヶ谷の家に至る一連の都市住宅
1997 第4回姫路市都市景観賞｜姫路工業大学書写紀念会館（東利恵と協同）
2007 第7回日本建築家協会25年賞｜塔の家

主な著書

［書名／出版社／出版年］

- 『住宅を考えなおす―何を基準にマイホームを選ぶか』｜実業之日本社｜1971
- 『現代住宅の設計手法』｜共著｜彰国社｜1975
- 『東孝光のこれからのすまい考』｜東急フレックスホーム部｜1977
- 『続現代建築の再構築』｜共著｜彰国社｜1978
- 『日本人の建築空間―私たちの祖先はいかに創ってきたか』｜彰国社｜1981
- 『居間は公園だ―私の都市住居学』｜丸善｜1983
- 『建築からの仕掛け―リ・インカネーション展1980−1985』｜共編｜学芸出版社｜1986
- 『都市住居の空間構成―住居における空間連結手法の研究』｜鹿島出版会｜1986
- 『住まいと子どもの居場所100章』｜鹿島出版会｜1987
- 『「塔の家」白書―六坪に住んだ二〇年』（住まい学大系10）｜東孝光＋節子＋利恵著｜住まいの図書館出版局｜1988
- 『設計者と語る都市型住宅の設計手法』｜編書｜彰国社｜1990
- 『都市・住宅論』｜鹿島出版会｜1998

特集されたもの

［特集名／書名／出版年月］

- 特集：七日間のユリシーズ―東孝光 作品と行動｜「都住」1968.7
- 特集：東孝光建築研究室・共同作業論｜「都住」1969.8
- 特集：在庫品目録―東孝光建築研究所｜「建築」1972.6
- 『日本建築家全集24―現代作家集Ⅱ』｜三一書房｜1973
- 特集：東孝光の都市的スペース｜「ハウスプラン」1975.4
- 特集：人と作品 東孝光｜「店舗」1979.5
- 「日本現代建築家シリーズ4―東孝光（新建築別冊）」｜新建築社｜1982.4

主な論文・記事

［タイトル／掲載紙／掲載年］

- 座談会：新しいデザイン活動の方向を探る（鶴岡英世×辻弘治×東孝光×紙野桂人×辻野純徳×小林邦雄）／提案：梅田地下街流動計画（グループ・チェック）｜「国際建築」1964.1
- 万国博がやってくる―今日までの動き／新しいデザイン組織への期待／万国博を成功させるために（グループ チェックの会）｜「デザイン（美術出版社）」1966.1−3
- 新宿駅西口開発にあたって｜「商店」1967.3
- ある抽象的解明｜「建築」1967.6
- 都市施設としてのターミナル周辺―その複合化の生態について｜「建築雑誌」1967.7
- 私の設計方法の原点｜「文化」1968.5
- An Architect must have His Own Project｜「JA」1968.6
- 六つの個室をはめ込む｜「文化」1968.9
- 討論：ホワイト・マジック・ボックス（東孝光×坂本宏昭×村田靖夫×秋山東一）｜「都住」1968.9
- 設計の立場から―矛盾や対立を共存させてゆくための方法｜「都住」1969.3
- 住宅設計における与条件について／Ft邸における与条件の処理｜「文化」1969.8
- ひとつの仮説｜「新建」1970.9
- 1970年、夏｜「都住」1970.9
- A Hypothesis｜「JA」1970.11
- 討論：独立住宅の設計はなお意味をもちうるか（東孝光×戎居研造×近藤正一×篠原一男×添田浩×高橋公子×西沢文隆、司会：神代雄一郎）／討論のためのメモ：反思想のための思想｜「文化」1971.2
- 座談会：住宅設計におけるセルフエイド系（東孝光×鈴木恂×宮脇檀×山下和正）｜「都住」1971.2
- 私の空間論―スペースとの出合い／空間をつくるもの／都市的スペースの認識へ｜「ダイケンニュース（大建工業）」1971.5−7
- 座談会：盗録 ARCHITEXT MEETING（相田武文×東孝光×鈴木恂×竹山実×宮脇檀）（特集：ARCHITECTURE MEDIUM アーキテクスト）｜「近代建築」1971.6
- クリエイティブチームのシステムと発想―東孝光建築研究所／対談：夢の触発―個人の情念と建築家の立場（東孝光×栗田勇）｜「商店」1971.6
- 座談会：設計と法規（東孝光×宮脇檀×山下和正）｜「都住」1971.6
- 粟辻邸設計メモ（村田靖夫と）｜「新建」1972.2
- 対談：連載対論1・2（宮脇檀×東孝光）｜「建築評論」1972.4・5
- 集住体AZ30961計画（特集：ARCHITEXT EXTRA）｜「都住」1972.8
- 「さつき」の子供の城｜「近代建築」1973.5
- さつき保育園からの報告｜「文化」1973.5
- 「さつき」からの報告｜「新建」1973.5
- 個別化集合住宅論｜「公評（公評社）」1973.8
- ある複合的関係｜「インテリア」1973.8
- 個から全体へ―ぼくたちの「都市的スペース」そのデザイン的検証／再び個へ｜「文化」1974.2
- 住まいについて：東孝光 人と作品｜「新しい住まいの設計」1975.3
- ぼくらの〈近景〉に広場はあるか｜「インテリア」1975.3
- 提言：街づくりで僕たちに何ができるか｜「商店」1975.6
- 現場からのフィードバック―さつき保育園 アンケートの解答についてのコメント｜「建築知識」1975.10
- 対談：構えず、揃えず（東孝光×宮脇檀）｜『宮脇檀 対談集 つくる術について五人のデザイナーたちと語った』（キサデコールセミナーシリーズ③）[新建築社／1976]
- ふたたび複合的関係について｜「インテリア」1976.4
- コンビニエンストアを中心とした複合形式のショップを空間の連続と分離の手法により成立させる｜「商店」1976.4
- “対話の武器”として…｜「建築知識」1976.11
- 裂け目―スリットの手法について｜「都住」1977.12
- 個からの集合へ｜「新建」1978.4
- 私の視点：再び建築の使い方について｜「日経アーキテクチュア」1979.11.26
- 塔状住居以後…｜「建築知識」1980.3
- 手を差しのべない限り｜「CREATE（佐藤工業）」No.41,1980.4
- 居間｜「ヤマハ建築セミナー通信」No.13,1980.4
- 特集：トップライトの研究―方法とディテール｜「室内」1980.6
- 座談会：家政と工学のはざま（東孝光×末石富太郎×三輪晶子×吉村元男）｜「山河計画―家（思考社）」No.2,1980.12
- 街に住む―タウンハウスの流行によせて｜「新住宅」1981.1
- 青山通りの建築―その二極構造のあいだを歩く｜「建築画報」1981.5
- 形態とする問｜「新建」1981.8
- 居住空間と快適さ｜「月刊NIRA（総合研究開発機構）」1981.10
- 対談：空間談議2―交差点にて（宮脇檀×東孝光）｜「LIVE ENERGY（東京ガス）」1982冬
- ポリフォニィ 住居における空間連結手法論｜「文化」1985.3
- 対談：環境と素材―私たちの方法（東孝光×東利恵）｜「住建」1995.5
- エッセイ：人間の知恵と機械のちから／街に超高層がやってきた／設計者よ、もっと現場へでかけよう／再生こそが生｜「新建」2003.9−12

掲載誌凡例
「文化」→建築文化　「インテリア」→ジャパンインテリア
「住建」→住宅建築　「商店」→商店建築　「新建」→新建築
「住特」→新建築住宅特集　「店舗」→店舗と建築　「都住」→都市住宅
「ML」→モダンリビング　「JA」→the Japan architect